

ティーチング・ポートフォリオ(教育業績ファイル)

教員氏名	小笠 恵美子
主な担当科目	キャリアと日本語, キャリアと日本語研究, 基礎ゼミ, 芸術鑑賞①, 芸術鑑賞②, 芸術特別研究Ⅰ, 芸術特別研究Ⅱ, 実践日本語研究Ⅰ, 実践日本語研究Ⅱ, 実践日本語研究Ⅲ, 実践日本語研究ⅢA(研究生), 実践日本語研究ⅢB(研究生), 実践日本語研究Ⅳ, 実用日本語Ⅰ, 実用日本語ⅠB(研究生), 実用日本語Ⅱ, 実用日本語ⅡA(研究生), 実用日本語ⅡB(研究生), 実用日本語研究Ⅰ, 実用日本語研究Ⅱ, 日本語と日本社会Ⅰ, 日本語と日本社会ⅠA(研究生), 日本語と日本社会Ⅱ, 日本語と日本社会ⅡA(研究生), 日本語と日本社会研究Ⅰ, 日本語と日本社会研究Ⅱ, 日本語日本文化Ⅰ, 日本語日本文化ⅠA(研究生), 日本語日本文化ⅠB(研究生), 日本語日本文化Ⅲ, 日本語日本文化ⅢA(研究生), 日本語日本文化ⅢB(研究生), 日本語日本文化研究Ⅰ, 日本語日本文化研究Ⅲ, 日本語文法とコミュニケーションⅠ, 日本語文法とコミュニケーションⅠA(研究生), 日本語文法とコミュニケーションⅡ, 日本語文法とコミュニケーションⅡB(研究生), 日本語文法とコミュニケーションⅢ, 日本語文法とコミュニケーション研究Ⅰ, 日本語文法とコミュニケーション研究Ⅱ, 日本語文法とコミュニケーション研究Ⅲ
2025年の教育目標・授業に臨む姿勢	例年通りレベルのばらつきがある授業参加者一人一人にできる限り対応することに加え、スマートフォン利用による弊害を伝え、情報ツールを使わず、「自分の力で」表現し、それに対する反応を得る経験を増やす。 特に中級以上の学生には学生間の共同学習を促す。
2025年の教育に関する自己評価	春学期は30人を超える人数の授業が複数あり、個別対応ができる範囲に限られた。その影響か、スマートフォンを常に見ている学生もいた。一方で、キャリアを意識した授業で行った企業分析を伴う授業や、言葉の定義とともに意見を書く文章作成の授業では「内容を考えさせる」と、年齢が上の学生がやりがいを感じている様子の感想を伝えてきた。毎年のことであるが、授業の意図をいかに伝えるかが課題である。
2025年のFD活動に関する自己評価	・語学分科会のFD会議の後の総合部会で非常勤の先生方との情報交換の場の設定の役割を得た。 ・2025年4月から日本語の担当をお願いした立川先生と密に連絡を取り、負担をかけないように配慮した。 ・基礎ゼミ分科会の書記として、個別授業の状況確認及び代講を行った。 ・非常勤の先生と学生の情報交換(特に出欠に関する状況)を密接に行い、欠席が続く学生に対しては授業支援室、専門の先生と連絡を取りながら出席を促す連絡を行った。
授業改善のために取り入れた研修内容	・2024年秋から始まった研修を受講し、2025年3月に登録日本語教師の資格を得た。日本語能力の評価法、学習者の広がり、社会環境の変化、第二言語習得論などのこれまでの研究および最新の知見に関する講義を受講した。 ・留学生のキャリア支援を考える研修会に参加した。 ・学生が出演している演奏会の見学は毎年積極的に行ってきたが、特に今年は作曲の発表に行く機会が多かった。一方で、学生に声を掛けられても授業と重なっていけなかったのがオペラの学内発表だった。

2025 年度(春学期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:3021 教員名:小笠 恵美子

1)アンケート結果に対する所見

問い 7、問い 9 に関して、具体的な数字と項目があり、参加学生の授業観、アンケートに対する理解がうかがえた。

- ・問い 7 の授業時間外の学修時間については、30 分以上 60 分未満、あるいは 60 分以上 90 分未満、120 分以上という 3 つの答えにいずれかで回答されており、「日本語の学修」全てを対象にするか、当該授業のみを対象にするか悩んだ結果だろうと理解している。
- ・問い 9 の授業で高めることができた力については、どの授業もコミュニケーション能力が選ばれることが多く、その一方で、文化・教養、多様性理解、実践力については高められるとしている回答が少ないという結果であった。これを受けて、言語の学修をしつつ、言語を使って触れる知識、内容について興味を感じられるように内容の工夫が必要だと感じている。

2)要望への対応・改善方策

具体的なコメントとして、日本人の喋り方や振る舞い方を学びたいといったものがあり、教室の外に一步出ると多くの日本人がいる環境でありながら、「日本語を学ぶ教室」には教員以外、日本語を第一言語とする人がいないということに疑問を持っているのではないかと感じた。教室外で、日本語を使ってクラスメートとコミュニケーションをとる機会を作れていない学生からのコメントではないかと推測している。留学生が自分から周りの日本人と話をする自信を持てるような内容を考える必要があると感じている。具体的には、文法、語彙や表現の学修だけでなく、状況の説明、自分の経験について実際に口に出す練習の時間をさらに増やす予定である。

3)今後の課題

2025 年の春学期開始時には履修希望者が教室の収容人数を越えたり、語学の演習の授業として適正な人数を越えたりするといったことがあった。2026 年度は人数の制限を設けて、より細かい対応ができる体制をとることを計画している。

以 上

2025 年度(秋学期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:3021 教員名:小笠 恵美子

1)アンケート結果に対する所見

満足度が授業によって大きく異なる。特に「実用日本語ⅡB」は満足度が低い。話す能力の向上を目的に「読んだ内容、聞いた内容の再話活動」を授業の主要活動としたが、困難を感じていた学生が多かったことが原因だろう。

「授業を受けて高められた能力」について、「文化・教養」「コミュニケーション能力」に比べて「専門技能・知識」「多様性理解」「自己表現能力」「実践力」が明らかに低い。日本語の授業であるため、一般的な語学の授業の印象から前者 2 つが選ばれた可能性が高いが、「多様性理解」「自己表現能力」「実践力」に対して抱いている印象や必要性が、学生と教員の間で齟齬があることも一因ではないかとも考える。また、言語の授業にこれらの能力との関わりを求めている学生がいることも考えられる。授業の中でより明確に意図を示す必要があるだろう。

2)要望への対応・改善方策

記述された内容は肯定的な内容であった。満足感を得たという学生が記述を残したと思われる。多様な学生が参加する授業の中でより多くの学生の満足をいかに求めるかが課題である。

春学期は、入学したばかりで日本語に不安を感じている留学生が日本語の授業に登録する傾向があることなどから、1 クラスにレベルの異なる学生 30 人以上が登録するという事態に至ったが、秋はそのようなことにはならなかった。裏を返すと、春学期は満足のいく授業にならなかったから、秋に登録しなかったのだと考えることもできる。今後、人数の制限を設けるなどして、適正な人数で授業を行っていきたい。

3)今後の課題

1)で書いた「実践日本語ⅡB」は、「読んだこと」「聞いたこと」を話す活動の前に、絵や動画の状況説明など、理解に負担をかけずに話す活動をするなど、段階的に難しくしていく工夫が必要だろう。また、漢字の読み方がわからず「話す」ことができない学生いることから、読む教材にフリガナを振ること、話す際の手掛かりとしてフリガナ付きのキーワードを示すなどの活動を行う。これを通して、学生自身がどのような助けがあれば「話す」活動ができるか考える時間をとりたい。

以 上